

シンポジウム2

受血者友の会の活動状況について ～10代受血者がつなぐ献血のキズナ～

小松尾麻衣¹⁾、川上友里²⁾、川西太徳¹⁾、丸岡賢一¹⁾、宮下幸一郎¹⁾、
白窪正四¹⁾、藤村慎一¹⁾、上床勇揮¹⁾、中村和郎¹⁾、竹原哲彦¹⁾
(鹿児島県赤十字血液センター¹⁾、鹿児島県立甲南高等学校²⁾)

2009年に提出された「献血推進のあり方に関する検討会報告書」¹⁾等で、輸血経験から献血の重要性を強く感じている受血者の声を献血推進に活かす方策が課題として挙がっていた。

鹿児島県では、2013年に「～献血ありがとう～のちをつなぐ友の会」(以下「友の会」と略す)を設立し、受血者や関係者により県民に対し広く感謝の思いや体験談などを届ける活動を行っている。将来にわたり目的意識を持った献血者の増加や持続可能な献血者、さらには初回献血者の確保に大きな成果を期待できることから、設立までの経緯と活動状況について報告する。

【設立までの経緯】

2011年、鹿児島県合同輸血療法委員会世話人会にて「受血者友の会(仮称)」の設立について了承を得、翌年開催された合同輸血療法懇話会にて県内の輸血医療関係者に対し「受血者友の会(仮称)」の設立目的と会員募集に関する協力を依頼した。特に、当時国立病院の血液内科部長兼副院長であった医師が中心となり、輸血を受けた患者に会の説明や入会募集を行った。

2012年、学術・品質情報課職員や技術部長が中心となり県医師会、県薬剤師会、県歯科医師会、県看護協会、行政、ボランティア団体、報道機関などの関係団体に委員就任依頼を行い21名の委員による「受血者友の会(仮称)」準備委員会を設立した。

その後、3回の協議を行い名称や活動内容について決定し、①県内の輸血医療機関との連携、②会員募集リーフレットの配布、③街頭キャンペーンでの広報、④インターネットによる募集、⑤各種情報誌への会員募集記事の掲載、⑥各報道機関を通じた広報、の6つの方法を用い会員を広く県民に募集し「友の会」を設立した。

【活動状況】

2018年10月現在、会員28名に増加し献血キャンペーンへの参加や献血セミナーでの講話、献血広報誌への寄稿等を通じ幅広く献血推進を行っている。

2018年6月に実施した「平成30年度市町村・保健所献血推進主管課長および担当者会議」では市町村や保健所の献血担当者に向け会員が輸血体験や輸血への感謝の気持ちを伝えた。受講者アンケートの結果から「友の会」の認知度は3割と低く、認知度の向上が課題であった。また、受講者多くは輸血体験や献血への感謝の気持ちを直接聞いたことで献血の重要性をより理解し、献血推進への意欲が高まる結果となった。また、受講者からは「受血者ならではの目線は説得力があり献血の重要性が伝わる」、「献血を身近に感じる機会になった」といった肯定的な意見が多かった。

また、献血終了後に献血処遇品と共に提供している献血情報誌(ABOネット)にて2016年より「ありがとうの手紙」と題し、受血者の皆様の輸血体験談や献血への感謝の気持ちを掲載している。2018年7月に発刊したVol.35号では高校生受血者からの「ありがとうの手紙」を掲載した。Vol.35号は中高生への献血セミナーの際にも配布し、若年層献血推進に活用している。セミナー受講者と年の近い受血者からの発信は輸血や病気について考えるきっかけとして有効であった。

ABOネットを読んだ方から、「また献血をしたいと思った」、「献血で助かる命があると実感した」、「より一層献血しなきゃ!という気持ちでいっぱいです」など感想が多く寄せられ、受血者の声が献血の意義を再認識させ目的意識を持った献血に繋がっていると考えている。

【友の会会員(川上友里さん)による若年層献血啓発】

輸血を受けた経験から、病気と闘う人の力になりたいと本会に入会した川上友里さんの働きかけにより、自身の在籍校を含む2高校にて卒業記念献血を実施した。卒業記念献血に参加したのは鹿児島県の公立高校2校であった。多忙な授業カリキュラム上、在学中に学校での献血実施は難しいため、3月の卒業式から大学進学までの間に固定施設での献血協力を呼びかけた。

両校ともに、医師をはじめ薬剤師、看護師など医療に携わる職種を目指している生徒の多い学校である。そのため、若年層献血対策と合わせて、将来の輸血用血液製剤のユーザーに血液の大切さや献血の重要性について知ってもらう貴重な機会となりうると考えている。

企画説明を兼ねた献血セミナーでは、卒業献血参加高校の在校生でもあった川上友里さんが在校生に向けて自身の献血体験について話し、献血の大切さや輸血への感謝の気持ちを伝えた。結果、献血に興味を持った高校生同士で自発的な献血勧誘やSNSを使った献血啓発が行われ、58名から献血協力を得られた。

【川上友里さんからのコメント】

私が高校3年間で献血と関わり、一番強く思うことは「献血はどんなボランティアにも負けない素晴らしい活動である」ということです。献血は、受血者の明日を紡ぐだけではなく、受血者を奮い立たせてくれます。骨髄移植に踏み切るころには、長期の入院やつらい治療で「自分なんか生きていたって・・・。」と自暴自棄になっていました。しかしそんな私に輸血は「生きろ！」とエールをくれ、不安で沈んだ私の心を奮い立たせてくれました。

世の中には、多くのボランティアが存在しますが献血ほどに誰かの命に直接役立っているという実感をくれる活動はなかなかありません。

皆さんの献血が誰かの明日を紡ぐのです。若い方の献血減少が取り沙汰されていますが、献血の

現状や献血によって助かる命があることを、より多くの若い方々に知ってもらいたいと強く願っています。

自分の周りの大切な人と、献血をすることで、きずなを深め、献血の輪を広げて欲しいと思います。そのために、私はこれからも献血推進活動に尽力したいと強く思っています。

今の私があるのも、学校に通えるのも、ボランティアに励めるのも、将来について思いをはせることができるのも皆さんの献血があったからです。私はそんな素敵な活動の一助ができて幸せです。

【考察】

「平成30年度市町村・保健所献血推進主管課長および担当者会議」にて実施したアンケート結果より「友の会」は設立後7年が経過しているが認知度は低いことが分かった。今後は活動の機会を増やし、認知度の向上につなげていきたい。

「高校生の献血意識に関する調査」²⁾でも今後の日本の献血確保において高校献血は重要な施策として挙げられている。卒業記念献血では多くの生徒が献血に協力し、鹿児島県における若年層献血強化に大きく寄与する結果となった。10代の若い受血者からの発信は、同世代である若年層献血啓発に繋がるとともに献血者自身がSNSを利用して献血推進を発信する二次的な広がりを発生させた。このことから、受血者の声は若年層への献血啓発や動機づけに効果があった。今後も友の会や固定施設と協働し、卒業記念献血の協力者数・参加校の増加を目指し活動を続けていきたい。

世話人の先生方をはじめ多くの方々の協力により設立した「友の会」は、本県にとって若年層を含む多くの献血者に影響を与える重要な献血推進活動団体となった。今後も会員の増加や活動内容の充実を図り、受血者・献血者・血液センター・医療機関・行政など輸血医療にかかわる方々とのキズナを深め、より効果的な献血推進活動を行っていきたい。

文 献

- 1) 厚生労働省医薬食品局血液対策課：献血推進のあり方に関する検討会報告書(平成21年3月10日)

- 2) 竹下明裕ほか：高校生の献血意識に関する調査、日本輸血細胞治療学会誌第62巻：711-717、2016